

自分の思いを大切にし、見方・感じ方を深め、意味や価値をつくりだせる児童の育成

—図画工作科における共通事項を意識した対話型鑑賞の授業づくりを通して—

石巻市立和湊小学校 佐藤 哲平

1 研究主題について

(1) 主題設定の理由

① 児童の実態から

本校第3学年の児童の図画工作科における実態を見ると、授業には意欲的に取り組めるが、自分の活動に自信が持てず、授業に対する満足感を十分味わうことができない様子が見られる。児童は、他の作品や活動と比べてしまうことで、自信を持てなくなることが多い。また、自分や友達の作品を見て、作品に対する自分の思いを具体的に表現することが難しいという実態がある。

② 学校の実態から

本校は、全校児童数が89名の小規模校である。入学前からほとんど変わらない人間関係であるため、児童同士が新しい関係を築き、互いのよさに気付ける機会が少ない傾向が見られる。

児童や学校の実態から、本研究に迫るために、自分の作品や活動を他と比べるのではなく、自分なりの価値をつくりだすことを大切にさせたい。そのためには、自分の思いを具体的に表現することができるように、友達の作品や参考作品を見る鑑賞の活動を取り入れることが重要であると考え。さらに、互いのよさに気付くことができるよう、本研究では、対話型鑑賞^{*1}を授業に取り入れ、児童が自分なりの言葉で作品を表現し意見を交流できる場を多く設定する。これらの活動を通し、作品から自分なりのよさや意味を見付けだし、自分の見方や感じ方を広げさせたい。また、児童の創作意欲を喚起する上で必要な知識となる共通事項を踏まえた授業づくりを行うことで、本研究主題に迫りたい。

(2) 目指す児童像

- ① 自分の思いを大切にし、新しい気付きや価値をつくりだす喜びを味わえる児童
- ② 身近にある作品について、自分の思いや考えを大切にし、鑑賞できる児童

2 研究の実際

(1) 研究の対象

石巻市立和湊小学校、第3学年1組21名、特別支援学級1名。

(2) 研究の方法

- ① 小学校図画工作科の鑑賞活動に関する研究
- ② 図画工作科の学習に関する実態調査と分析
- ③ 対話型鑑賞を取り入れた指導計画の作成と授業実践
- ④ 学習指導要領第3学年及び第4学年[共通事項]を意識した授業実践
- ⑤ 授業実践を通じた児童の変容の分析と検証

(3) 研究の概要

① つくりだす喜びを味わえる授業づくり

自分の作品や取組に自信を持っていない児童に対し、自分の思いを持って活動させることが大切であると考え。そのためには、表現したいものを具体的に想像し、自分なりの思いを持って活動することが大切であると考え。授業では、自分や友達の作品のよさや面白さを見付けたり、認め合ったりすることで自信を持って活動できるよう、様々な方法で鑑賞会を実施していきたい。日常生活や図画工作科の授業の中で感じたよさ、面白さなどをノートに書き、表現や鑑賞の活動に活用することで、つくりだす喜びを味わえる授業づくりを実践していきたい。

② 鑑賞活動における工夫

どの題材においても鑑賞会の時間を設定し、年間を通して、対話型鑑賞を取り入れる。これまで児童は、作品に対する感想を持ち、発表することができたが、児童同士が一つの作品に対し、互いに自分の考えを発表し合うことは少なかった。そこで、対話型鑑賞を授業に取り入れることで、自分だけでは気付かなかった作品のよさ、面白さに気付かせることができるのではないかと考えた。作品に対する自分の見方や感じ方を広げることで、さらに、次の表現活動への意欲につながれると考える。また、固定された人間関係で生活してきた児童にとって、これまで気付かなかった友達のよさに気付くこともできると考える。

対話型鑑賞は、対話による鑑賞法として美術館等で行われている。本研究においても、児童の視野を広げ、見方や感じ方を深めるための重要な手立てとして対話による鑑賞を対話型鑑賞と捉えている。また、授業づくりにおいて、共通事項を意識し①と②の取組を、いったりきたりさせながら授業実践を行い研究主題に迫りたい。

3 授業における手立て

(1) つくりだす喜びを味わえる授業づくりの工夫

① めあての明確化

授業では、各題材におけるめあて、手順、注意点、完成までの時間配分を板書したり掲示したりして明確に示した（図1）。教師がめあてを明示することで、



児童は、目的意識を持って表現や鑑賞活動を行うことができると考えた。めあてを示し、目的を持って表現や鑑賞活動を行うことで、つくりだす喜びを味わう授業づくりを実践した。

② ミニ鑑賞会の実施

授業の各段階でミニ鑑賞会を実施し、表現活動の一助とした。導入の段階では、児童に完成のイメージを持たせるために参考作品を見せた。



展開の段階では、表現活動のヒントとするために、友達が表現したものの工夫点や取組の様子を他の児童に見せた（図2）。授業中に気付いたことや、自分の思いを大切にすることで、つくりだす喜びを味わう授業づくりを実践した。

③ 「仕上げる」ことの意識付け

各題材において、表現と鑑賞を一体として捉えることができるように、自分が表現したものを、友達に見せることを意識して表現させた。特に、自分らしく仕上げることを意識して取り組んだ。絵で表現する活動では、自分の絵に合った色の台紙（色画用紙）を選ばせ、台紙に絵を貼り、タイトルを工夫させた（図3）。立体や工作で表す活動では、表現したものをタブレット端末で撮影させた。工夫点を解説しながら動画で撮影したり、静止画に書き込んだりして保存した。自分が表現したものに自分らしさや価値を持たせることで、つくりだす喜びを味わう授業づくりを実践した。



(2) 鑑賞活動における工夫

① 対話型鑑賞を深める発問リストの作成

表1 対話型鑑賞を深める発問リスト

全体から感じとらせる発問	・何がこの作品の中で起こっていますか。 ・何が見えますか。どんな音が聞こえますか。どんな匂いがしそうですか。 ・気になるものはありますか。 ・どんな気持ち（感じ）になりますか。
形や色などに迫る発問	・どんな形・色がありますか。 ・気になった形・色がありますか。 ・どうして〇〇な形・色なのでしょう。 ・何の形に見えますか。 ・どんな材料をつかっているのでしょうか。
切り返し	・何を見て（どこから）そう思ったのですか。

やつけたしの発問	・なぜそう思ったのですか。 ・同じように思った（感じた）人はいますか。 ・ちがう感じ方をした人はいますか。 ・何か付け加えたい人はいますか。 ・他に発見したものはありますか。
動作による問い掛け	・気付いて欲しいところを指さす。 ・作品の向きを変える。 ・作品を並べて見せる。

② 様々な鑑賞会の実施

表2 今年度実施した鑑賞会（一部）

題材名	鑑賞会の実施方法
切ってかき出しくっつけて	自分のお気に入りの向きで、つくったものを撮影し、テレビに映し出して鑑賞した。
わたしの6月の絵	図工室前の廊下に貼り「和渕小美術館」として学級で見合った。
お気に入りの場所	小さな自分をお気に入りの場所に置き撮影したものを使って、「私はどこでしょうクイズ」を実施した。

様々な鑑賞会を実施した（表2）。どの鑑賞会においても、ただ見るだけでなく、対話型鑑賞を深める発問リスト（表1）を基に、対話型鑑賞会を実施した。児童の気付きを促し、友達の表現したものや取組に対して、自分の意見を述べたり、友達の発言を聞いたりした。

(3) 共通の工夫点

① いいねノート、タブレット端末の活用

図工の時間だけでなく、日常生活において自分が「いいな」「面白いな」「きれいだな」と感じたものや景色、鑑賞会や自分の表現活動の様子などを記録するために、メモ帳とタブレット端末を活用した。記録したものは、表現活動のアイディアとして生かした。初めはノートを使う児童が多かったが、1学期後半から、タブレット端末を使うことが増えた。

② 表現と鑑賞の一体化を目指して（共通事項を意識した授業づくり）

鑑賞会の時間を授業の中に明確に位置付け、継続して取り組んだ。児童は、鑑賞することで表現する意欲が高まり、表現したものを鑑賞することで表現したものや取組に自信を持つようになった。「鑑賞→表現→鑑賞→表現…」と表現と鑑賞を一体として捉えるようにした。

4 授業実践Ⅰについて

(1) 題材名 「身近なしぜんの形・色」（7月8日実施、5時間扱い 3・4時間目で実践）

(2) 1・2時間目の活動の様子

校庭にある植物の葉を集めたり、組み合わせたりして、身近な自然を見るだけでなく、触ったり、聞いたり、嗅いだりし、体全体で感じた。

(3) 3・4時間目の活動（本時）

集めた葉の形や色から感じたよさや面白さを、絵に表す活動をした。導入では、教師が3パターンの参考作品（図4）を黒板に貼り、完成のイメージを持たせるためミニ鑑賞会をした。仕上げの活動では、台紙にする色画用紙を十色以上準備し、自分の作品に合う色を選び作品を貼らせた（図5）。



図4 参考作品



図5 児童の作品

絵の具やのりが十分乾いてから、校舎内の多目的スペースと校庭で鑑賞会をした。児童は、多目的スペースでは窓や床、校庭では木の枝や草むら、遊具の上などに作品を飾り、児童同士で見合ったり、タブレット端末を使い撮影したりした（図6）。友達や教師に見てもらうことで、自分の作品に自信を持つことができた児童がいた。



図6 鑑賞会の様子（左：室内、右：校庭）

5 授業実践Ⅰの成果と課題

(1) 成果

- ①日常生活において、自分が見つけた面白いものや美しいものに気付き、ノートやタブレット端末に記録する児童が増えた。気付いたことを、教師や友達に紹介する児童がいた。
- ②鑑賞活動を楽しみにし、表現活動にも意欲的に取り組む児童が増えた。また、ミニ鑑賞会を実施することで、友達が表現したものや取組のよさに気付いたり、学習意欲が向上したりした。対話型鑑賞で教師が鑑賞のポイントを示すことで、いろいろな見方、感じ方があることを知ることができた。

(2) 課題

- ①教師が共通事項を意識するあまり、知識を教え込むことがあった。対話型鑑賞では、教師はファシリテーターに徹していかななくてはならない。そのために、どのような声掛けをすれば、児童同士の発言をつなげ、交流していくことができるか研究していく必要がある。
- ②時間に見通しを持って活動することができず、他の児童と比べ、活動の進度に大きく差が付く児童が2名見られた。このため、児童が見通しを持って活動できるような工夫が必要である。題材のめあてを導入の段階で板書するだけでなく、活動の手順、時間配分などを明確に示すことで、毎時間めあてを意識して取り組むことができるのではないかと考え

る。

(3) Ⅱ期に向けて

多くの児童と鑑賞活動をしていくことで、いろいろな見方、感じ方に気付けると考える。本校は小規模校であるため、他学年と交流授業をするなどして、異学年での交流を図っていきたい。

6 授業実践Ⅱについて

- (1) 題材名 「いろいろうつして」（10月25日実施、6時間扱い 6時間目で実践）

(2) 1時間目の活動

スタンプ台を設置し、簡単にスタンプを押すことができるようにした（図7）。様々な色や形を使ってスタンプを押す楽しさを味わわせた。



図7 活動の様子

(3) 2～4時間目の活動

3～4人のグループになり、持ち寄った材料を囲み、相談しながら版づくりをした。相談しながらつくすることで、いろいろなアイディアが生まれた。

自分の表現したいものに合う色を選ばせて刷った。乾燥させた後、文字や模様などの細部、背景をカラーペンや色鉛筆、クレヨンを使って描き足した（図8）。



図8 仕上げの様子

(4) 5時間目の活動

表現したものをタブレット端末で撮影し、工夫したところなどを書き込み、グループで発表し合った。次時に向け友達に紹介したいことを話し合った。

(5) 6時間目の活動（本時）



図9 鑑賞会の様子

和小つ子スペース（多目的スペース）に「和渕ランド」をつくり、鑑賞会を行った。「和渕ランド」とは、自分たちが表現したもので作ったテーマパークのことで、遊園地や動物園、水族館のコーナーがある。本時は「和渕ランド」を自由に鑑賞したり、全体で鑑賞したりして、自分たちの取組を振り返った（図9）。

7 授業実践Ⅱの成果と課題

(1) 成果

- ①教師は、児童の気付きを促す発問ができた。児童は、単に発表を聞くだけでなく、考えながら鑑賞す

ることができた。

②自分の表現したものに自信を持って発表する児童が増えた。仕上げの活動まで丁寧にすることは、自分が表現したものに満足感を得ることにつながった。このことで、自分の取組に対する自信を持つことができ、授業に対する達成感を味わうことができた。また、グループで発表し合うことで、互いのよさを認め合うことができた。

③実践授業Ⅱの実施後、先生方や各学級に招待状を書いた。多くの人が「和渕ランド」を鑑賞した。他の学年から感想が書かれた手紙をもらったり、「和渕ランド」に来た児童や教師を本学級の児童が案内したりするなど、学校全体を巻き込んで充実した活動ができた。多くの人と接することで、見方や考え方を広げる機会が増えた。

（2）課題

①教師が準備していた発問により、表現したものに對するいろいろな気づきを促すことができたが、色や形、組合せ方のよさに気付かせるような発問が足りなかった。本時のねらいに迫る発問を準備する必要があった。

8 研究の成果と課題

（1）児童の変容と分析（4月、12月に実施したアンケートの結果を基にした考察）

「図工の勉強は好きですか？」という質問について、「好きではない」と回答した児童が4月は3名いたが、12月は0名になった。学級全体が、図工の勉強が好きになったことが分かる。「鑑賞することは好きですか？」という質問について、4月は4名の児童が「好きではない」と回答していた。その理由は「おもしろくない」「楽しいと思っただけ」というものだった。12月は「好きではない」という児童が1名だった。ただし、この児童は、授業中に実施したミニ鑑賞会については楽しくて好きだったと回答している。「どういう鑑賞の仕方が楽しかったですか？」という質問をしたところ、4月は「友達の作品を見る」「特にない」という回答だったが、12月は「一つの作品をみんなで見る」「みんなの前で発表する」「友達と一緒にいいところを見付け合う」「先生方を招待する」「自分の好きなところに飾って鑑賞する」「タブレット端末を使った鑑賞会をする」などの多様な回答があった。いろいろな方法で鑑賞会を実施したことにより、児童は鑑賞の活動を通して見方や感じ方を深めて、楽しんでいたことが分かった。

（2）つくりだす喜びを味わえる授業づくりの成果と課題

①授業のめあてを明確にすることで、目的意識を持って活動に取り組むことができた。指導内容、児童の実態、共通事項を意識し、題材に応じてめあてを

設定する必要がある。

②ミニ鑑賞会は、表現が苦手な児童にとって、活動のヒントになる有効な手立てだった。また、意欲的に活動している児童にとっても、新しいアイディアが浮かぶなどの変容が見られ、有効な手立てであった。今後は、どのような目的で、どの場面で実施すればより効果的なのかを検討していく必要がある。

③仕上げの活動まで丁寧に扱うことで、表現したものや自分の取組に対して満足感を持つことができ、自信につながった。自分としての価値を付けるという意味で有効な手立てだった。

（3）鑑賞活動における成果と課題

①対話型鑑賞を深める発問については、まだまだ研究が必要である。今年度の実践で、鑑賞に対する児童の意識に変容が見られたことから、今年度の研究で作成した発問リスト（表1）を基にして、今後はねらいに迫るための発問について、児童の実態等も踏まえながら、実践と検証を重ねていきたい。

②様々な鑑賞の仕方を児童に経験させたことで、児童は「鑑賞＝見るだけの活動」という考え方が変わってきた。アンケートの記述から、鑑賞会で友達に見てほしいから表現活動でいろいろな工夫をするようになった児童がいた。この児童は、鑑賞と表現を一体として捉えていることが分かる。各題材で、鑑賞会の時間を明確に位置付け、様々な方法で鑑賞会を実施したことは、有効な手立てであった。ただし、鑑賞会のめあてをしっかりと示す必要があり、そのめあては共通事項を意識したものにする必要があると考える。

（4）今後の取組について

「いいねノート」を持たせたことで、日常生活で、気になるものや不思議だなと思うものを見付けたり、美しい景色に感動したりする児童が増え、物事を見る視点が豊かになってきた。タブレット端末は、いいねノートとともに使用することで、表現活動の途中の様子や、表現したものを記録できるため、評価の一助と活用できる。今後は、場面に応じてノートとタブレット端末を併用し、更に有効な活用方法を研究していきたい。

【注釈】

*1 美術作品の意味や価値を解説するのではなく、質問を投げかけて観衆や生徒に思考と対話を促す¹⁾鑑賞の形式。

【引用・参考文献】

1) 上野行一著：「まなざしの共有—アメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶ」 淡交社 2001

【図表等の許諾について】

図1～9は、授業実践の中で教師が撮影した写真である。研究の目的にのみ使用することとし、児童の保護者及び所属校の校長から使用許諾を得た。